

## 金賞

### あの子の笑顔

横須賀学院中学校三年 北島 颯也

僕が小学生の時、同じ学年に児童相談所から通っていた子がいた。その子は四年生で転校して来たので最初の頃はいつも一人でいた。話しかけても、少し笑うだけで言葉は返ってこなかった。先生が「みんな仲良くしてね」と言っても、クラスの空気は何となくよそよそしかった。

ある日、誰かが言った。「あの子親と一緒に住んでないんだって。」その言葉がきっかけで、その子への視線は一気に冷たくなっていった。僕も何となく距離を取ってしまった。「関わらない方がいいのかもしれない」「どう接すればいいのか分からない」と思っていた。今考えると、それが無関心という形から生まれた差別だったのだと思う。

ある日、道徳の授業で「人権」について学ぶ時間があつた。先生は、「人は誰でも、安心して生きる権利がある。たとえ家庭の事情が違ってても、それで差別されていい理由にはならない」と話した。その時僕はその子に対して猛烈に罪悪感を感じた。その子は、自分のせいで児相にいるわけではない。家庭に問題があつたとしても、その子自身が悪いわけでもない。それなのに僕たちはその子のことを特別な存在のように扱ってしまっていた。

次の日、僕は数人でその子に声をかけた。

「一緒に帰らない？」と。最初は驚いた顔をしたけれど、少しうなずいて一緒に歩いてくれた。話してみると、その子はとても優しく、本が好き

で、面白い考え方をする子だった。僕は、今までなぜもっと早く話しかけなかったのだろうと後悔した。

次の日から、少しずつその子との距離が縮まり、学校でも笑顔が見られるようになった。クラスの他の人たちもその子と話すようになり、だんだんと打ち解けていった。その子が話してくれた言葉が、今でも忘れられない。「最初は、自分がここにいていいのか分からなかった。でも、今は少しだけ安心して学校に来られるようになった。」

僕はその言葉を聞いて思った。人権は誰かに与えられるものではなく、誰かがもともと持っているものだということ。そして、私たちのちよつとした言葉や行動が、誰かの人権を守ることに、傷つけることにもつながるのだということ。

学校は、誰にとっても安心できる場所でなければならない。家庭に問題がある子も、見た目が変わっている子も、性格が内気な子も、みんなが自分らしくいれる環境が必要だ。そのためには、「知らないことが怖いこと」「違うことが変なこと」と決めつけない心が大切だと思う。

僕は、この出来事を通して人権について深く考えるようになった。そして、自分にもできることがあると気づいた。大きなことではなくても、話しかけること、気にかけること、誰かの存在を当たり前のように受け入れること。それだけでも、人の心をあたためることができるのだと感じた。

これからも、どんな人とも分け隔てなく接することができるよう自分の心のあり方を大切にしていきたい。そして、誰もが安心して笑える学校を、みんなでつくっていかたいと思う。

## 金賞

### 傷つけられる人々の尊厳

横須賀学院中学校三年 酒井 貴 市

「普通」という言葉に、僕たちはどれだけ無自覚でいるのでしょうか。社会には、目に見えない「普通」の枠があり、そこからはみ出した人は、時に好奇の目にさらされ、心無い言葉を投げつけられてしまう。僕は最近、二人の友人の経験を通して、その「普通」という名の暴力が、いかに人の尊厳を傷つけるものであるかを痛感する出来事がありました。一人ひとりが生まれながらにして持っているはずの、誰にも侵されてはならない大切なものが、なぜこんなにも簡単に見過ごされ、踏みにじられてしまうのでしょうか。これは、遠いどこかの話ではありません。僕の心の中で、今も解決できずにいる問題なのです。

その問題がより身近に感じられた一つ目の理由は、外国から来た友人が受けた差別的な発言です。彼は生まれつき皮膚や目の色素が不足するアルビノという特性を持っていて周りとの見た目の違いに本人は悩んでいました。そんな彼の心をさらに傷つけたのは、今流行りの漫画やアニメから生まれた「アルビノ」美人・イケメン」という安易な固定概念でした。ある日、彼は意地悪な同級生から「アルビノなのにイケメンじゃないね」や「猿みたいだね」と信じられない言葉を浴びせられていました。

友人がうつむくその横で、僕は何も言い返せませんでした。喉まで出かかった反論は、彼らの嘲笑の前にあっけなくかき消され、握りしめた拳のやり場も見つかりませんでした。その日以来、明るかった彼は元気をなくして、新学期から塞ぎこんでしまいました。他人の無責任な偏見が、ひとりの人間の心を深く傷つける。その現実に覚えた「静かな憤り」は、彼らに向けられたものであると同時に、大切な友人を守れなかった自分自身への、どうしようもない後悔と無力感だったのです。

二つ目に、海外を含めた性的マイノリティや性自認に関する問題です。僕と友人のクラスには、自身の性自認が女性だと感じている同級生がいました。その子は、周りが「女の子」らしいと感じるような、可愛い物が好きでした。小学校の頃は、それがただの個性として受け入れられていたその「好き」という気持ちたちが中学に上がった途端、一部の男子生徒によるいじめの標的になってしまったのです。「男のくせに」「気持ち悪い」といった言葉が、彼の心を少しずつ蝕んでいきました。アルビノの友人の一件で、見て見ぬふりをした後悔に苛まれていた僕は、今度こそにげてはいけなさと強く思いました。「気持ち悪い」という陰口が聞こえた時、僕は勇気をふり絞って彼らの輪に入り、「彼の好きなものを、どうして君たちが馬鹿にする権利があるんだ」と確かに言いました。声は震えていたかもしれませんが。完璧な反論ではなかったかもしれませんが。でも、あの時のように黙っていることだけは、絶対にしたくなかったのです。かつては彼の個性として輝いていたはずの物が、集団の中の「普通」と違うだけで、なぜ攻撃の対象にならなければならないのでしょうか。

この二つの出来事を通して、僕は社会に根づく無意識の偏見の恐ろしさを身を持って知りました。見た目や性別、あるいはその人らしさといった、本来尊重されるべきものが「普通」という曖昧な基準で裁かれ、誰かの尊厳が簡単に傷つけられてしまう。そんな社会であってはならないはずです。

だから、僕はもう傍観者ではありません。僕たち一人ひとりが自分の中にある「普通」というもののさを疑うべきだと、などと大きなことをいう前に、まず自分が変わります。目の前で誰かの尊厳が傷つけられそうになった時、「それは違う」と声を上げる勇気を持ちたいです。そして、自分の中にある「普通」という名のナイフで、無自覚に誰かを傷つけることのないよう、常に自分を疑い続ける人間でありたい。それが、傷ついた友人たちへの僕なりの償いであり、僕自身が人間としての尊厳を失わないための唯一の道だと信じています。

## 銀賞

### 戦後八十年残された僕たちができること

横須賀市立常葉中学校三年 菅野雄仁

今年は戦後八十年という大きな節目を迎える。僕たちの祖父母や、さらにその上の世代が生きた戦争の時代は、教科書の中の出来事として、どこか遠い過去のように感じていた。しかし、父と二人で神奈川平和祈念館を訪れたことでその考えは大きく変わった。

そこに展示されていたのは、戦争の時代を生きた人たちの生活が伝わってくるような数々の資料だった。一枚の写真には、空襲で焼け野原になった街が写っていた。昨日まで家族団らんの笑い声が響いていたであろう場所に、瓦礫が広がるだけの写真だった。別の資料には、戦地へ向かう息子に宛てた母親のインクが滲んだ手紙があった。無事を祈る気持ちだが、文字から痛いほど伝わってきて、胸が苦しくなった。戦争は、人の命や財産だけでなく、家族の絆やささやかな幸せ、当たり前にあるはずの平穏な日々を、冷酷に奪い去っていく。その事実を目の当たりにして、僕は言葉も出なかった。

特に心に残っているのが、「AI語り部」との対話だった。モニターの向こうにいるのは、戦争体験者の記憶を受け継いだAIだ。僕が質問すると、AIは体験者の言葉で、当時の過酷な状況を生々しく語り始めた。「食べるものがなく、雑草まで食べた」「いつ爆弾が落ちてくるか分からず、夜も眠れなかった」その声は合成された音声のはずなのに、そこには確かに、戦争に苦しんだ人の痛みや悲しみが感じられた。

この日に学んだ「過去」はただの古い歴史なのではないこと、今この瞬間にも、世界のどこかで同じように繰り返されている「現実」なのであることを意識させられたことがあった。それは父が見せてくれた新聞記事である。

そこには、戦争によって苦しむ外国の子どもたちの声が書かれていた。「子どもたちは天国に行きたいと話している。少なくともそこには食べ

物があるから」(七月三十日朝日新聞「天声人語」)その言葉に、僕は息を呑んだ。生まれた国や場所が違うだけで、どうして命の重さが変わってしまうのか。戦争を始めるのは、国の指導者たちかもしれない。しかし、そのせいで、僕と同じように夢や希望を持っていたはずの普通の人々の日常が、未来が、そして命さえも奪われていく。このどうしようもない不公平さに、僕は強い怒りを感じた。国や人種、信じるものが違うからといって、誰かの人権を踏みにじつていい理由は、絶対にあってはならない。中学一年生の時、僕は「戦争を非日常として捉え、無意識のうちに軽んじていることが、僕たちの課題だ」と人権作文に書いた。あれから二年が経ち、その気持ちはさらに強くなっている。確かに、僕一人の力で、今起きている戦争を止められるわけではない。世界中から人権侵害をなくすることもできない。大きすぎる問題の前では、自分がいかに小さい存在かを思い知らされる。

しかし、だからといって諦めていいのだろうか。何もできないと目を背けてしまうことは、結局はその理不尽さを認めてしまうことになるのではないか。僕が一番避けたいのは、まさにその「無関心」だ。自分には関係ない、遠い国の話だ、と切り捨ててしまった瞬間、僕も間接的に人権侵害の問題の一部になってしまうのではないか。

僕たちにできることは、まず「知る」ことだと思う。祈念館で過去について学んだように、今、世界で何が起きているのかを知ろうとすること。そして、それに対して自分はどう感じるのかを「考える」こと。なぜこんな悲劇が起きるのか、どうすればなくせるのか、考え続けること。その考えを持ち続けていれば、いつか、自分の意見を言うべき時に「声を上げる」勇気が生まれてくるのだと信じている。

戦後八十年。戦争を知らない僕たちの世代が、その記憶と教訓をどう受け継ぎ、未来に繋げていくのかを試されている。AI語り部が記憶を伝えてくれたように、今度は僕たちが自分の言葉で平和と人権の尊さを伝えていく番だ。無関心という冷たい壁を乗り越えるために、僕はこれからも、知り、考え、そして学び続けていきたい。それが、平和な未来を作るために僕たちができる、確かな一歩になると信じている。

## 銀賞

### 世界に寄り添って

横須賀市立大楠中学校三年 小山 凛

自分が見ている世界が周りに理解されないと知ったらあなたはどうか感じますか。そしてあなたの周りには自分にとって理解し難い考えを持つ人物はいますか。

私には、統合失調症を患い周りとは異なった世界を見ている祖母がいます。統合失調症の祖母は幻聴や幻覚に追い込まれており、そんな祖母を私は理解できませんでした。

私が小学二年生の夏に横須賀に引越してくるまでは祖母も一緒に生活していました。当時から統合失調症の症状はありましたが、明るく元気でした。ですが四年前、祖母は頭を打ってしまい、頭蓋骨の中で出血をしたためその血を抜く手術をしました。それ以降、認知症も発症し、しばしば警察沙汰になることもありました。この頃から私は祖母に会うたび寛容に接することができなくなっていき、祖母と楽しく会話をする、という機会は減りました。

祖母の口癖は「誰かに見られてる」や「誰かがイタズラしに来る」などで、祖母の世界にいる悪人たちに盗まれないよう、家中の私物に名前を書いたり、タンスの奥にしまいます。そして自分でどこに隠したのかも忘れ、それをまた「誰かが盗んだんだ」と言います。

祖母とは、一日に何回も同じ話をします。

「これ食べる？」

「要らない。」

「あ、これ食べる？」

「要らないってば。」

簡単に表せばこんなものです。これが何度も何度も繰り返されると、鬱陶しくなってしまうです。

時には顔を合わせた途端、「あなた誘拐されたって？」や「入院大変だったでしょう」と言ってくる時もあります。もちろんこんな事実はなく、祖母の妄想で生まれた話です。

私は徐々に祖母の言動を真に受けられないようにするようになりました。妄想も、いちいち真に受けて否定してもキリが無いことに気づいていったからです。

でも、こうして自分では本気で言っていることを誰にも信じて貰えないのは相当辛いだろうとも感じていました。しかし本人が一番辛いのは分かっているけど、周りでケアする祖父、母、私も相当疲れていました。どうにか祖母が健康でいられるように、家に行った時は母が何日分の栄養のある夕食を持っていったり、お花を買っていったり、たくさん工夫をしました。他にも財布やカードを無くさないよう目立つケースを買ったりしました。それでも祖母の病は進行し続けるため、中々効果を見出せずにいました。

しばらく祖母の話に聞く耳を持たず過ごしていると、不意に「無関心」になってはいけない、向き合ってあげないといけない、そんな考えが浮かびました。

そうして私は祖母の言動を振り返りました。そうすると、気づいたのです。自分をどれだけ否定されても、祖母はいつも親切の気持ちで私に話しかけてくれていました。私を否定しませんでした。どんなに私が口を悪くしても、優しく話せなくても、祖母は一貫として優しくかったのです。そうして「不意に」と感じたあの時の気づきは、底なしの祖母の優しさによって生まれた気づきだという事も分かりました。

私はやるせない気持ちになりました。再び祖母の家を訪れた時、私は自分の「気づき」を大切にしながら話しました。やはり祖母は、常に親切で優しいのです。どんな話題でも私の事を気にかけてくれていました。私は再びやるせない気持ちになり、今までの私の態度に対して少し怒りと悔しさを覚えました。それでもまだ、話していて怒ってしまう時はあります。でもこれは聞く耳を持たず無関心でいるより、祖母の世界に寄り添ってあげられているのではないかと考えています。

世界には、人の数だけ考えがあり、世界があります。この先自分にとって受け入れ難い考えの人に出会ったと、その度に戸惑い、苛立ち、距離を置こうとするかもしれません。ですが、相手を拒絶するのは悪手です。寄り添い、相手の感じていることや考えに目を向けられた時、それは気づきをもたらしそうです。自分の大きな成長に繋がります。

私にとって祖母の存在は、「異なる世界を見ている人」です。ただそれだけです。今でも完全に理解することはできません。それでも寄り添う姿勢や気持ちは持ち続けていたいと思います。これが「自分とは異なる世界」を見る祖母から気づき、学んだことだからです。

そんな風に人々が寄り添い合えば、日々体感していく意見の相違による喧嘩や、世界中の小さな心のズレによって起きた事件や問題なんかもどうって事なく、大したものではなくなる、と私は信じています。